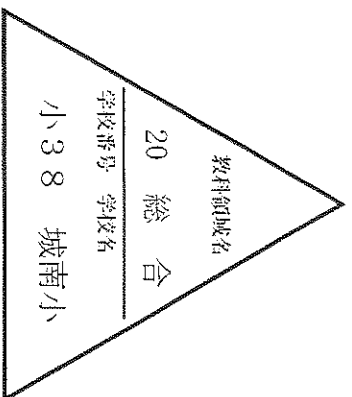


令和２年度 岡崎市教育論文



高い問題意識をもち、

主体的に学び続ける児童の育成

6年生 総合的な学習の時間

「白もくれんの並木再生プロジェクト」の実践を通して

城南小学校 6年生部会

代表 松崎 俊介

— 目 次 —

1 はじめに	1
2 研究の仮説と手だて	1
3 指導計画	2
4 抽出児童	2
5 実践の様子	
(1) 段階【気付く】体験からの課題認識・課題設定	3
① 白もくれんとの出会い	手だてア
② 樹木医の授業 専門家からのアドバイス	手だてイ
③ 私の木の継続観察	手だてウ
④ 金原さんとの出会い 専門家からのアドバイス	手だてエ
(2) 段階【考える】情報の収集と整理	6
① 木の命について考える話し合い	手だてエ
② 地域の人の思いを知る	手だてオ
(3) 段階【実行する】学びの発信と継承	10
① 城南シテイクカーニバルで発信する	手だてカ
② 5年生に保護活動について伝えよう	手だてキ
6 研究の考察	12
(1) 段階【気付く】 体験からの課題認識・課題設定	
(2) 段階【考える】 情報の収集と整理	
(3) 段階【実行する】 学びの発信と継承	
7 おわりに	13

1 はじめに

「城南小学校といえば、白もくれんの学校ですね。」隣の市の教育長先生にご挨拶をした時、そう返された。市外までその名をとどろかせた本校の白もくれんは、校庭の南側、グラウンドの周囲に40本以上ある。いや、正確には「あった」。3月の卒業式のころには桜よりも一足早く、大きな純白の美しい花を咲かせて児童たちの卒業を祝い、通りを行く学区民の目を楽しませた。しかし、この数年は枯れ枝が目立ち、キノコが生え、台風で折れてしまうものもある。「昔はもつときいいだった」学区の総代や登下校のボランティアからの話は気にはなっていたが、予算もなく、打つ手はなかった。しかし、昨年末、ユネスコからの助成が受けられることになり、白もくれんの再生に本格的に取り組めることになった。学校の象徴ともいえる白もくれんの並木再生を児童に託し、これを教材化することで、学校への愛着、愛情、学区への思慕の念を育めると考えた。また学区の人たちと協働的に取り組ませることは、この地域で生きる一人の人間としての自覚をもたせる絶好の機会となるだろう。本校の児童は素直で、何事にも興味関心をもって取りかかることができる。しかし、継続して一つのことに取り組むことはあまり得意ではなく、自分から課題や問題を見つけ出すことが苦手である。特に、思考する場面では、表面的な捉えはできるが、理由を考えたり、他のことと関連付けたりすることは大変苦手としており、安易で短絡的な結論を導く傾向にある。その一方で、人との関わりにおいては、とても思いやり深く、どんな友達も温かく受け入れ、一緒に生きようとすることができ、子供ながらに懐の深いところがある。この児童らが、朽ちてしまう白もくれんの再生に長いスパンで取り組む中で、学びと振り返り、そして発信を繰り返し、後輩へと活動を引き継いでいくことができるれば、学校の白もくれん並木は発展的な教材として、児童たちをさらに深い学びへと導いてくれるはずだ。そう考え、この取り組みを3つの段階「気付く」(体験からの課題認識・設定)「考える」(情報の収集と整理)「実行する」(学びの発信、継承)で構成し、児童たちが多くの人の思いに触れながら、自然の命の尊さ、再生の難しさを実感し成長していく姿を追究した。

2 研究の仮説と手だて

本校児童が興味を継続させながら、積極的に活動に取り組むためには、人と関わった活動や、人の思いを感じられる活動が不可欠であると考えた。そこで、目指す児童の姿、および仮説、手だてを次のように考えた。

目指す児童の姿

高い問題意識をもち、主体的に学び続ける児童

○ 高い問題意識をもつ児童とは

- ・ 身の回りの小さな変化に気付き、その背景や影響について意欲的に調べる子
- ・ 調べたことの中から、気になることや疑問を見つけることのできる子
- ・ 自分の見つけた問題を解決するために進んで調べ、考え、活動する子

○ 主体的に学ぶ児童とは

- ・ 自分の問題を他と共有し、また、他の問題にも関心をもって共有し、協働的にその解決に取り組む子
- ・ 一人で解決できない問題や、すぐに解決できない問題に対してもあきらめず、外部の協力を得たり、長いスパンで見通しを立てたりして解決方法を探り、継続的に取り組む子。

【仮説】 単元の中の、「気付く」「考える」「実行する」の3つの段階において、

それぞれの段階ごとに具体物や人、また関わる人の思いと触れ合う機会を設けながら、児童の思考を整理し関わらせ、深める授業を展開すれば、児童たちは高い問題意識をもてるようになり、主体的に学び続けることができるようになるだろう。

● 段階「気付く」・・・体験からの課題認識・課題設定

- 手だてア 教材との出会わせ方を工夫する
- 手だてイ 専門家からのアドバイスを受けて活動させる

- ① 白もくれんの実態調査 ② 傷んだ木の保護活動

手だてウ 「わたしの木」を割り当てて樹木を継続して観察させる

● 段階「考える」・・・情報の収集と整理

- 手だてエ 木々の命について考える話し合いを行う
- 手だてオ 地域の人の思いを知る活動を取り入れる

● 段階「カ行する」・・・学びの発信・継承

- 手だてカ 城南カーニバルで学区や学校全体に活動を広め発信する
- 手だてキ 後輩に引き継ぐための活動を考える
- 手だてク 卒業してからも関わり続けるため、植樹を行う

3 指導計画

資料 1 単元の計画

段階	時間	活動	留意点	手だて
気付く	1	白もくれんとの出会い	白もくれん並木の存在を知る	手だてア
	2	樹木医の授業(専門家からのアドバイス)	白もくれんの現状を知る	手だてイ
考える	随時	私の木の継続観察	自分の木をもち、継続観察をする	手だてウ
	2+3	金原さんとの出会い(専門家からのアドバイス)	立ち枯れの原因を探る	手だてエ
実行する	2	木の命を考える	元気な木への手当てを行う	手だてオ
	4	地域の人の思いを受け止める	学区の人を招いて話を聞く	手だてカ
4+α	4	全校に知らせよう	城南カーニバルで発信する	手だてキ
	4	5年生に保護活動について伝える	自分たちの思いも伝える	手だてク
4	4	新しい白もくれんを植樹しよう	学区の人と思いを共有する	手だてク

4 抽出児童

児童A、Bを抽出児童として取り上げ、実践をもとに検証をしていく。

【児童A】何事にも興味や関心が高いが、継続して一つのことに取り組みのは苦手である。

体育や図工などの技能教科が好きで、得意なことには粘り強く取り組むことができる。人とのかかわり方は温かい。

⇒ 白もくれんを知り、保護活動をする中で、樹木にも命があることを実感させたい。また、それらを大切に思っている人と関わって、その思いに触れることで自分の思いの変化を確かめ、具体的な活動を進めるなかで、主体的に動き出す姿を期待する。単元を通して、一つのことを深く追究する楽しさを感じられるようにしたい。

児童B…物事を多面的に捉えたり、人の意見を受け入れたりすることを苦手としている。

理論的に考えることができるが、自分の価値観だけで物事を判断してしまうことが多い。
⇒ 白もくれんの保護活動を通して、一本一本の木々に命があることやそれらを大切に思っている人の思いを受け止めて、活動できるようにしたい。考えの幅を広げ、他と協働して問題を解決することができるようになりたい。

5 実践の様子

(1) 段階【気付く】体験からの課題認識・課題設定

① 白もくれんとの出会い手だてア

児童に、「学校を代表する木はなに？」と問いかけると、決まって「ケヤキの木」という答えが返ってくる。本校には、いくつかの部屋に樹木の名前が付けられている。児童がよく使う多目的ホールにも「けやきホール」と名前がついている。古くから学校にある木にもかかわらず、咲く期間が短いこと、学校の南と西側にしかないことで白もくれんの存在を知る児童は少なかった。もともと、単元の始めには白もくれんだけでなく、学校の多くの樹木に関心はなかった。学校を代表する樹木にもかかわらず、咲いている場所に多くが気付いていないこと、そして、児童の半分が、白もくれんの存在すら知らないことに愕然とした。

そこで、最初に白もくれんが咲いている時期の写真を見せることにした。今までのデータとして残っているものや、昨年度末に取り貯めておいたものを順番に見せると「きれいな花」と児童の呟きが聞こえた。予想通り、花の名前すら分らない児童がほとんどだった。一部の児童が、「何の花?」「通学路のところにあるやつ?」と反応した。ここで初めて「白もくれん」という名前を教えた。ここではまだ、知ったというレベルである。(資料2)

児童と並木を見に行くことにした。(資料3) 実際には、昔のような白もくれんの元気が姿はなく、幹はぼろぼろになっているものも多く、学習を始めた6月は葉が少しついている程度である。満開の美しい写真を見せた後に、実際の姿を見せ

- 白もくれんの写真を見たときの様子
- 1 T 学校を代表する木はなに?
 - 2 **A** 現 ケヤキの木です。
 - 3 T それってどこに植わっているの?
 - 4 C 校舎の前... (などつぶやき多数)
 - 5 T じゃあ、これって何の花だと思う(写真を見せる)
 - 6 C ...分かりません。(多数)
 - 7 C ...きれいな花... (数名)
 - 8 C 何の花?
 - 9 C あ、通学路にあるやつ?
 - 10 T 学校の西と南側にあるね
 - 11 C 私は、みたことあるよ。
 - 12 **A** 現 僕もみたことはある気がする...。
 - 13 T みんなは見ることがあるかな?
 - 14 C はいです。(多数)
 - 15 T このきれいな花は白もくれんっていうんだよ。

資料2 白もくれん(写真)との出会い



資料3 実物との出会い

ることで、衝撃を受け、その姿に関心が高まることを期待した。

児童らは、目を丸くして言った。「これが白もくれん？さっきの写真の白もくれんですか？」予想通りの反応である。きれいに花を映かすことが当たり前だと思っていた白もくれんが、傷だらけで、やせ細っており、中にはキノコが生えているものまである。児童らはその元氣のない姿に、期待通りかなりの衝撃を受けたようだった。40数本ある木々の中で、多くの木が葉も付けず、枯れているのである。

児童Aは、白もくれんの様子に、「どうしてこうなったのか、また調べてみたいです」(資料4)と感想に書いた。

児童Aの何事にもすぐに興味をもつ性格からこの反応は予想していた。この気持ちを継続させ、児童Aが白もくれんについて粘り強く考え、保護をしたいという気持ちに向かわせるためには、児童Aが問題に対して深く考えていけるだけの、知識が不十分であると考えた。そこで樹木医を招き、立ち枯れの原因について話を聞く会を設けた。

② 樹木医の授業 専門家からのアドバイス 手だてイ

岡崎市がみどりの学校の活動として派遣している樹木医を招き、白もくれんをみていただいた。また、城南の白もくれんの状態についても詳しく教えていただいた。外では実際に児童たちとともに地面や樹木の状態を調べ(資料5)、教室では樹木の命をつないでいくために必要なことを教えていただいた。(資料6)

傷んでいる木を木槌でたたくとコンコンと軽い音がする。

児童Aも木槌を使って、音の違いを体験した。「見ただけでは分からなかったことが(中略)分かりました。木の音を聞いて、本当に弱っていることがわかりました。」(資料7)というの記述から、児童Aが白もくれんの状態を正確に把握したことが分かる。また、「本当に弱っている」、という表現には、そのことに対する不安や心配の気持ちが表示されている。資料7「これからも、という手当てができるのか知りたい」という児童Aの言葉からは、専門家の指導を受けるなど、誰かの助けを借りながらも、何ができるのか継続的に探っていきたいという思いが感じられる。資料4の「また調べてみたい」よりも思いは強まっている。専門家との出会い(手だてイ)は児童Aの保護活動への思いを強め、主体的に動き出すきっかけとなったと言える。

白もくれんを見に行っただけど、葉もなく
て、痛んでいる様子だった。写真で見
た白もくれんが、こんな姿でおどろきま
した。どうしてこうなったのか、また調
べてみたいです。

資料4 児童Aの白もくれんを見た感想



資料5 樹木医の授業 幹の音調べ

大切なこと
1. 幹の音は、木の健康の目安。
2. 音は、木の健康の目安。
3. 音は、木の健康の目安。
4. 音は、木の健康の目安。
5. 音は、木の健康の目安。

ハクモクレ
ツを聴察し
て気づいた
こと
枯れ枝が多い
キノコがついている
花が咲かない木がある
葉が小さい
葉がゆがんでいる

資料6 樹木医の資料より

自分が見ただけでは分からなかったことが、樹木医の方に来てもらっていろいろ分かりました。木の音を聞いて、本当に弱っていることが分かりました。たくさん生えているキノコはあまりよくないことも分かりました。これからもうという手当てができるのか、知りたいです。

資料7 児童Aの授業後の感想

③ 私の木の継続観察 手だてウ

樹木医からまずは、よく観察することが大切だという指導(資料5)を受け、白もくれんに番号をつけて一人一人に割り当て、継続して観察することにした。しかし、白もくれんが咲くまではまだ9か月ほどあり、木々の変化が分かりにくいいため、児童たちの観察も、次第に勢いがなくなっていく。色々なことに興味を示しやすい児童Aも、最初は観察の記録を細かくとっていたが、変化の少ない樹木の観察に少しずつ興味を失ってきた。

④ 金原さんとの出会い 手だてイ 専門家からのアドバイス

児童らは樹木医の授業から、白もくれんに対する知識を増やしていき、次はどうしたら、そのような危機的な状態を解決できるかiPadを活用し、樹木につくキノコのことを調べたり、弱った樹木の再生方法を調べたりしたが、思うように解決方法を見出せなかった。そこで児童の疑問と一緒に解決してもらえるように、樹木の世話、管理を専門的に行っている金原造園の金原さんを講師に招いた。学校の白もくれんの植わっているところは日当たりが良すぎることで、幹が乾燥すると傷みやすいこと、腐ってしまった部分は取り除いて手当をした方がよいことなどを教えてくださった。その後金原さんと一緒に樹木の手当てをした。(資料8) 白もくれんの乾燥を防ぐために、幹に幹巻きテープを巻いた。さらに、根元には、麻でできたマツトを敷き、水を与えた。児童Aの「卒業までに少しでも復活に近づけるようにしたい」(資料9)という感想は、「できないかもしれないけれど……」というニュアンスを含んだ消極的な意志ではあるが、前向きにはなっている。活動に行き詰っていたが、自分の木に手当をして、安心した表情も見えた。(資料10) 専門家から直に話を聞き、具体的な手当てをしたことで、活動意欲が少しずつ戻ってきた。実際に専門家と関わることの効果を実感した。

金原さんとの話し合いから、今ある白もくれんの中から、金原さんが見て、手当てする甲斐のありそうなものを優先的に手当てし、その他の木については、様子を見ていくだけで、手当てはしないことにした。残された木の中には、すでに枯れている木もあるが、まだわずかながらに葉をつけており、あと数年は花を咲かせるだろうという木もあった。すぐに切ってしまうこともできたが、児童らに今後のことについて考えさせたいと思い、あえて言及をせず、児童の活動に託すこ



資料8 幹を保護するテープを巻く児童A

金原造園さんが来てくれたおかげで、いろんなことを知りました。例えば土が乾燥しないようにマツトを引いたり、幹巻きテープをまいたりしました。僕たちが卒業するまでに少しでも復活に近づけるようにしたいです。

資料9 作業を終えた児童Aの感想



資料10 自分の木の手当てをし安堵した表情の児童A

にした。児童Aは自分の木は手当てがされ、また少し、白もくれん再生への関心が戻っている。しかし、ここでの一つの不安が生まれた。児童らは手当てのされている木とそうでない木があることが分かっていたが、その事にはあまりこだわらない。授業のたびに書く感想には、「木を再生させたい」「調べたい」(資料11)というような言葉が多く見られたが、児童Aも手当てされた自分の木以外には、全く反応を示さなかった。児童たちは単に自分の白もくれんを観察しているだけで、その命に寄り添って考えることはできていないのではないかと、そう考えた。そこで、手当てをされている木(近い将来枯れてしまう木)の存在を児童たちの意識の中で際立たせれば、児童たちが枯れてしまう木の命について寄り添って、考えることができるのではないかと。



資料12 白もくれんの掲示

(2) 段階【考える】情報の収集と整理

写真で比較することで、手当てのしてある木は「少しづつ葉が増えていく」(C2)こと、手当てをしていない木は「元気がない」(C7)ことに気付くことができた。そして、手当てをすることもできないぐらいに傷んでしまっている木があることが共有できた。「もうだめってことかな」(C9)「治らない木もあるのかな」(C10)

というような意見も出された。(資料13)この時は、弱っている木も手当てをすれば、治るであろうと楽観的な児童もまだいたが、そうではないことに気が始めた者もいた。児童Aは自分の木は手当てされているからか、発言しなかった。

① 木の命について考える話し合い 手だてエ

金原さんとの調整が上手くつかないまま、7月を迎えたある日、大雨によって11番の白もくれんが倒れた。幸い、フェンスの内側で児童のいない時間だったので人がいなかった。(資料14)この倒木を、白もくれんの命について深く考えさせるきっかけにしたいと思い、幹巻テープを巻いていない木について話し合いの場を設定した。

これからつづきがふやせるように、毎日観察をして、きつめたことなどを納得するまで調べていきたいです。

資料11 授業後 児童Aの感想

- 1T ここにあるのは、白もくれんの全部の木だね。並べてみると何か気付くことってないかな？
- 2C 手当てのしてある木は少しづつ葉が増えていく気がする。
- 3C 葉が全然ない木もあるね。
- 4C 先生、僕の木は幹巻きテープがまいてありません。なんでですか？
- 5T なんでだろうね みんなどう思う？
- 6C 予算の関係？
- 7C C4の子の木はもとと元気がなかったよね。
- 8C 幹巻きテープが巻いてある木はもとと少し元気だったかな？
- 9C 幹巻きテープが巻いていないってことは…もうだめってこと？
- 10C 治らない木もあるのかな？
- 11C 金原さんに聞いてみたらいいと思います。
- 12T そうだね。今度金原さんに聞いてみようか。

資料13 掲示を見ながらの話し合い

資料13 掲示を見ながらの話し合い



資料14 倒木と 佐賀県の事故資料

児童の思いを揺さぶるために、佐賀県で実

際に起こった事例を冒頭に用いた。(P 6 資料

14) 授業の冒頭で、大雨により白もくれんが折れたことを伝えると、児童たちは「やっばり」という反応だった。そこで、佐賀県で倒木がきっかけで事故が起こり、小学生が死亡した事件の記事を提示し、「シンボルだった松の木をどうすべきだと思うか」と尋ねた。(資料 15) 児童らは「切った方が良い」とすぐに答えた。なによりも子供の命が失われたことへの反応が一番大きく C6～C8 まで「切った方が良い」という意見が続いた。C 8 「切らない方がいひけど」を受け、C9 で「全部じやなくても」という意見が出たので少し広げたいと思い「それはなんで」と問い返した。

C11 が「残すのも大切」「シンボルだし」と発言したが、児童 B は「でも、人の命には代えられない」とすぐに反応した。教室の空気が児童 B を中心とする「人の命には代えられないから」という伐採派と、C9 の児童をはじめとする「全部を切らなくとも」という中立派の間で止まってしまった。そこで、話を白もくれんに戻し「手当てをしていない木をどうしたらよいか」と再度問い返した。(T14) 中立派は「道路側に出てしまっているのは切る」「危ない木は切る」というように少しでも白もくれんを残す方法を提案するが、児童 B は「人の命が大切です」とそれを受け入れない。確かに、人命には代えられない。ただ、今の白もくれんの状況が、直ちに人命に影響するかというと、そうではない、児童 B にはそのことに気付いてほしいと思った。T22 でその意見を認めつつ、ほかの考えも求めると「植樹」「移植」という意見に交じって C19 を受けた C25 「いろんな人にとって大切な木

T1 実はこの間の大雨で、白もくれんが一本折れてしまいました。(実物を見せる)

C2 えっ… C3 やっばり折れてしまったか…

T4 それとね、今日、ネットを見たらこんな記事があったんだけど… (虹の松原の記事のプリントを配る)

T5 唐津のシンボルだった松が折れて事故につながったんだって。みんなはこの松の木をどうするべきだと思う？

C (少し考える)

C6 私は切った方がいひと思います。人に危害があつてはいけないと思います。

C7 私もあぶないから切った方がいひと思います。

C8 命にかかわるし、命は重いから、切ります。

切らない方がいひけど…

C9 でも、全部じやなくともいひんじやないかな。

T10 それはなんで？

C11 なんか残すのも大切だと思います。市民のためだし、シンボルだし

B 児 12 でも人の命には代えられないよ

C13 本当に危なかったら切った方がいひと思う

(話し合いがとまる)

T14 なるほどね。じゃあ、みんなの木も大雨の影響で折れてしまったんだけど、まだ、幹巻きテープを巻いていない木もあるよね、みんな、それらの木をどうしたらいいと思う？

C (話し合う)

C15 やっばり危ない木だったら、切った方がいひと思います。

C16 折れた木は中がスカスカで、これが大きな木だと折れたら危ないと思います。

B 児 17 ふれあいの道は 2 年生とかもよく遊んでいるし、もしものがあつたらって考えたら切った方がいひと…人の命は大切です。

C18 危ないところ、例えば道路側に出てしまっているのは切った方がいひかもしれないです。

C19 でも木を切ったら悲しむ人もいるんじゃないかな

T20 悲しむって誰が悲しむのと思うの？

C21 植えた人とか、卒業生とか…

T22 なるほど、切った方がよいと思う人がたくさんいるみたいだね。他にはどうかな。

C23 移植させるのもいひかなと思います。

C24 シンボルだけど、新しいシンボルもあつていいと思うから新しいのを植えるのはどうかかなと思います

C25 私はいろんな人にとって大切な木な気がするから、もう少し様子をみたらいいと思います

C26 もともとは元気だったし、樹木医さんに聞くのは？

C27 やっばり木にも命があると思うし、生きてるから、簡単に切るのはいけないと思うし様子を见たいです。

T28 みんなどう？

C29 うーん… (迷う)

A 児 30 卒業生たちの思いって言うっていいけど、話を聞いてみたいなって

C31 卒業生が決めるっているのはどうですか？

T32 なるほど、卒業生の思いってみんな聞いたことはあるかな？

C33 ない。聞いてみたい。

資料 15 幹巻きテープを巻いていない木をどうするか

な気がする」と自分たち以外の人の思いに触れる意見が出され、C27「木にも命がある。生きている」という白もくれんの命に言及する意見が、ここでやっと児童の口から出た。白もくれんの今後についての結論は出ず、児童Bの意見も変容はなかったが、児童A30の提案を受け、自分たち以外の人の意見を聞いてみたいという点でまとまった。

② 地域の人の思いを知る **手だてオ**

児童たちの気持ちや、地域の人へと向かってきたところで、城南小の白もくれんにとっても深い思いを寄せている学区のボランティア水谷さんと、白もくれん並木の前に住んでいる総代の殿井さんをお招きし、白もくれんについての話を聞く会を開いた(資料16)。

殿井さんからは、白もくれん並木が一番美しく咲いていたころのことや、白もくれんの花言葉、先人の思いなどについてお話を聞けた。水谷さんからは、白もくれんに対する思いを聞かせてもらった。話の後の児童との一問一答は(資料17)の通りである。

児童は、「白もくれんを切ると聞いたらどう思いますか。」(C1)とストレートに質問をした。「もし枯れていて危険な木があるなら切ってもいいけれど、そうでないなら…、もしフェンスから木が出ていても誰も文句は言わないと思います。」という殿井さんは答えた。「そうでないなら…」という言葉から、思いのある木を簡単には切ってほしくはないという気持ち伝わってくる。「公園から学校の方を振り返って真っ白な花を見ると全部救われたような気持ちになって、(中略)嫌なことがあると城南公園まできて学校の方を向いて、白もくれんさんありがとうと家に帰ることがありました」最後の水谷さんの言葉を児童たちは、神妙に聞いていた。

児童Aもなぜ白もくれんにこだわるのかを質問した。明確な答えはもらえなかったが、



資料16 地域の人の思いを聞く会

C 私たちは白もくれんがもし道路とかに折れたりして落ちたら危ないとクラスで話し合って、殿井さんたちは**白もくれんを切ると聞いたらどう思いますか。**

殿井 確かに、落ちてきた木があるなら**危ない**。でももしまだ枯れてない木があるなら、それは…。もし枯れていて**危険な木があるなら切ってもいいけれど、そうでないなら…、もしフェンスから木が出ていても誰も文句は言わない**と思います。

(A児) 白もくれんを植えたときに、**ほかの木でもないのに**なんで白もくれんを植えたのか？

殿井 誰が言い出したのかは分からない。ごめんなさい。でも、白もくれんには高潔な、という嘘のない行動をする、**潔い**という意味があるから、それも一つの理由ではないかと思います。

C 白もくれんに対する思いを教えてください。これからも、ずっと白い花が咲いてほしい。そういう思いです。できればあれ以上枯らさないように、わたしもいかんです、自分の家の前にある白もくれんが枯れました。なんでもっとはやく水をかけてやらなかったかなあと反省しています。

水谷 本当に気高い花っていうことで、花が咲くのを本当に楽しみにしています。城南小の卒業式の代名詞になっている花。式の中で必ず「満開の白もくれんが」ってどこかで出るんです。(中略)卒業式の花として白もくれんを一番大切にしたい。私はあの花を見ると本当に心が気持ちよくなります。朝、いっちゃんなことを考えて、公園から学校の方を振り返って真っ白な花を見ると全部救われたような気持ちになって、(中略)嫌なことがあると城南公園まできて学校の方を向いて、**白もくれんさんありがとうと家に帰ることがありました。**

資料17 殿井さん、水谷さんとの一問一答

殿井さんの考えを聞いて、業後の感想には、「僕たちがしっかり育てていきたい」と強い決意が記された。(資料 18)

児童は初めて、自分たち以外の人が白もくれんについてどう思っているのかを聞いた。白もくれんについての強い思いは、児童の心を動かしていた。また、児童Bの考えに変化も感じた。児童Bは活動には意欲的であったが、どこか、学校の白もくれんを他人事のように感じていた。前時の話し合いでも、頑なに「白もくれんは切った方がいいと思う」と、自分の考えを変えることはなかった。そんな児童Bが学区の方の思いを聞いて「でも切らないでほしいという学区の方々の思いがあるから、できれば切りたくない」と書いている。

(資料 19) 並木を再生させたい、という思いは皆と同じである。しかし、「人命に影響があるときは、早く切ってしまった方がいゝ」そう思っていた児童Bが、学区の方の思いを受けとめて「できれば切りたくない」と考えを変えている。そして、「木を切らなくてすむ」ように心配な木を「別のところへ植える」という代案を見い出してきた。再生という点では弱いが、伐採という考えを捨てたのは、児童Bにとって大きな変容である。ここに至って、白もくれんが児童Bにとって身近なものになり、自らが保護すべき対象として強く意識された。この会の後で、子供たちの思いはとて大きくなり、活動の中に「こうしたい」「やってみたい」という意思が感じられるようになった。思いをもっている人と触れることは、主体的な学習への一つのポイントだということをあらためて感じた。

講話の後、児童は水谷さんのことが気にかかっていた。心が洗われるとはどういうことなのか、水谷さんの経験はどのようなものなのか知れたかった。実は水谷さんには、ご主人の闘病生活を支えていた過去がある。その辛い時に、学校の白もくれんを見ることで、心が癒されたという。そのことを、学級の児童に話すことにした。心が洗われるといった水谷さんの心の内を知った児童らは、一瞬言葉を失い、教室は静まり返った。「もう一度見たいという思いがかなうように、精いっぱい頑張りたいと思います。」

(資料 20) という児童Bの記述からは、水谷さんをはじめとする学区の方の思いをかなえたいという、強い意志が感じられる。枯れそうな木は危ないから、伐採すればよいと、簡単に考えていた児童Bの姿はもうそこにはなかった。児童らの中に、水谷さんや殿井さんの思いも背負って、白もくれんの並木再生に取り組んでいきたいという、さらに強い思いが生まれてきた。

白もくれんに「高潔な心」という意味があるとは、知りませんでした。殿井さんたちが白もくれんへの思いがすごく感じました。例えば「白もくれんを見ると心が洗われる」という語は感動しました。僕たちがしっかり育てていきたい

資料 18 話を聞いた児童Aの感想

白もくれんの並木は再生させたい。でも切らないでほしいという学区の方々の思いがあるから、できれば、切りたくない。だから植えかえればいいと思った。今の白もくれんで元気があり、花を咲かせられそうな木を残し、かれてしまっているような木を別のところに植え、新しい白もくれんの木を植えればいいと思う。それなら木を切らなくてすむと思った。

資料 19 話を聞いた児童Bの感想

先日、白もくれんのお話を聞かせていただき、ありがとうございます。水谷さんの話から、今までどれだけ白もくれんのことを思っていたのかがよく分かりました。昔はきれいな白い花が咲いていたということを知り、今の白もくれんもその時のようにできるか、心配になりましたが、水谷さんの白もくれんのきれいな花をもう一度見たいという思いがかなうように、精いっぱい頑張りたいと思います。本場にありがとうございます。

資料 20 児童Bのおれの手紙

(3) 段階【実行する】 学びの発信と継承

① 城南シテイカーニバルで発信する 手だてカ

本校には、城南シテイカーニバルという行事がある。各学年がお店という形で、総合学習の学びをまとめ発表する。

(資料 21) 今回は、これまでに調べたことを全校や保護者に発信することで自分たちの活動を振り返り、後半の活動へつなげて行くのがねらいである。学年での話し合いから、①白もくれんの存在とそれが今危機的な状態にあること、②学区の方々の思い、の2点についてまとめ、伝えようということになった。

児童Aは、白もくれんの危機的な状況について、模造紙にまとめ、発表をした。それに加え、自分たちも現在、どうするか悩んでいる「弱ってきた木の伐採」について、お店に来てくれる人にも意見を聞きたいと考えた。そこで、アンケートを実施し、思いを集めることにした。弱った木をどうしたいかの質問について、①様子を見る、②移植をする、③危ないところだけ切る、④伐採し、新しい木を植樹する、という4つの選択肢を考えた。(資料 22) この時点では、具体的な植樹の方法について児童Aはよく分かっていない。しかしながら、たくさんの方の思いを知り、そこに寄り添って、白もくれんの手当てをしていきたいと考える児童Aの姿が見られた。これは、一つの考えで簡単に意思決定をしていくのではなく、いろいろな人の意見を基に、自分たちの意見を再構築していきこうと主体的に活動する児童Aの姿といえる。



資料 22 人の思いを集める 児童A

児童Bは自分が大きく感銘を受けた学区の方の思いを伝えることで、白もくれんを大切にしてもらいたいと考えていた。発表では、調べた一般的な白もくれんのことだけでなく、学区の方の思いを熱く語る姿が見られた。カーニバル後の感想用紙に「並木を絶対に復活させたい」と児童Bは書いた。(資料 23) 「絶対に」という言葉から、ここでも児童Bの思いが強くなっていることが分かる。また「学区の方々の思いがあるから」と児童Bが学区の方々と協調して活動を進めていきたい思いが感じられる。これは、活動当初、児童Bに期待していた変容でもある。

資料 23 カーニバル後の 児童B の感想

「今までは白もくれんが元気になればそれでいいと思っていたけれど、カーニバルでいるなかへ発表をしたり、聞いたりして、学区の方々の思いがあるから、白もくれんの並木を絶対に復活させたい。」

カーニバルでは学区の評議員の方も来校された。児童の白もくれんに対する思いが伝わり、今後は金銭面でも協力してくださることになり、並木再生、新木植栽への道が一気に開けた。また、保護活動に関心をもってくださった学区の方より、後日多額の寄付もいただいた。児童の活動が、学区の方をも巻き込んで、さらに規模の大きいプロジェクトへと進化してきた。児童自身も、自分たちの活動の方向性に自信をもつことができた。

② 5年生に保護活動について伝えよう

これまで児童は白もくれんの現状と向き合い、どうしたら並木を再生できるかについて、よく考えてきた。しかし、白もくれん(樹木)はすぐには変化をしない。5年、10年と長い時間をかけて、再生していくものであろう。児童は、木の継続観察でそのことに気がついており、卒業するまでの並木再生は難しいということを感じ始めていた。そこで、「白もくれんのこれからについて」話し合うことにした。(資料24)

最初は、C2、3のように雑草を取ったり、水やりをしたりと、今までと同じように、金原さんに教えてもらった保護の方法が挙がった。児童A、Bも金原造園さんに来てもらって新しい手当ての方法を探ろうとしていた。

今現在の活動に目を向ける児童は多くいたが、卒業後や次年度のことについて意見は出なかった。今の保護活動は、白もくれんの並木再生に貢献しているはずだが、それだけでは足りないということを児童らは分かっているはずである。そこで、T26のように「今の保護活動だけで、並木は再生するのか」問い返した。すると児童Bがすぐに「下の学年にも伝えていかないといけないと思います」と引き続きに意見を述べた。常に自分なりの見通しを立てている児童Bらしい発言である。児童Bの発言を機に、学級全体が引き続きについて考え始めた。児童Aは業後の感想で「次の学年に教えていきたい」と主体的に活動へ取り組む気持ちを記している。(資料25) 熱しやすく冷めやすい児童Aが白もくれん並木の再生プロジェクトに出会い、調査し、人に関わって思いを集め、そして今度は自分から発信しようとしている。大きな成長だといえる。児童Bは、引き続きについて考えさらに「興味をもって自分たちから進んでやりたい」と、5年生の思いにも目を向けている。(資料26) 最初は活動ありきで、思いの薄かった自分を振り返っての記述である。今は意欲的になった児童Bだからこそその記述だといえる。

5年生に保護活動を引き継いでもらいたいという願いを強くした児童らは、「つなげ！」

手だてき

T1	みんな、これから白もくれんってどうしていいと思う？
C2	木の周りの雑草を取ったらいいと思います。
C3	水やりをしたらいいと思います。
C4	金原造園さんも言っていた土を柔らかくするのがいいと思います。
A児5	金原造園さんに来てもらって、状態を教えてください。いいと思います。
B児6	私も冬にやった方がいいこととか、あると思うから、しっかり聞いて、対処したらいいです。
(中略)	
T26	みんな、今できることについて考えているね。でもさ、今の保護活動だけで、並木は再生するのか。
B児27	下の学年にも伝えないといけないと思います。今だけよくても意味がないと思います。
C28	木は一年だけじゃ変わらないBさんの意見がいいと思います。
C29	私も、5、4年生が知らなかったら続かないと思います。未来のことを考えないといけないと思います。
T30	具体的にどうしたらいいのかな？
C31	ポスターはいいと思います。
C32	お昼の放送で流すのもいいよね。
(後略)	
資料24	白もくれんのこれからについて考えよう
資料25	話し合いを終えた児童Aの感想 雑草を抜いたりすることが大切だと思っていたけど、話し合いから、 <u>今年だけでなくこれからの人たちに受け継がれるように次の学年に教えていきたいです</u> 。そしてこれからもシンボルにしたいです。
資料26	話し合いを終えた児童Bの感想 たしかに私たちだけ白もくれんがきれいでも意味がないから、5年や4年にも教えた方がいいと思った。 4、5年生は白もくれんを知らないから、自分なら何も知らなくて、興味がなかったことを無理やり受け継がれても、いやだから、 <u>興味をもってもらって自分たちから進んでやりたい</u> というてもらえるようにしたい。

白もくれんプロジェクト！」と新しいプロジェクトを立ち上げた。まずは、白もくれんの美しさややすばらしさを伝えるために、iPad を活用して、写真で特徴を伝えた。さらに、現状を知るために、グループ活動で5年生と一緒に白もくれんの観察をした。(資料 27) 5年生の感想を受けての児童Bの記述には、自分の願いが伝わってうれしいと、喜ぶ姿が見られた。

私は白もくれんを知りたい、でも6年生が頑張っているから守ってきたくれた



と知りました。学区の人が大好きな白もくれんを復活させたいです。(5年)

資料 27 5年生への引継ぎ

6 研究の考察

ここでは仮説及び手だてについて、その有効性の検証と考察を行う。

【仮説】 単元の中の、「気付く」「考える」「実行する」の3つの段階において、

それぞれの段階ごとに具体物や人、また関わる人の思いと触れ合う機会を設けながら、児童の思考を整理し関わらせ、深める授業を展開すれば、児童たちは高い問題意識をもてるようになり、主体的に学び続けることができるようになるだろう。

(1) 段階「気付く」 体験からの課題認識・課題設定

手だてア 教材との出会いの工夫

児童印象強くに残る方法がよいと考え、美しい花の写真を見せてから、危機的な現状に実際に見学に行くことにした。資料 3 の児童Aの姿から、興味を持たせることはできた。しかし、それが持続しなかったことから、他の手だても必要だった。

手だてイ 白もくれんの実態を調査と保護活動 専門家からのアドバイス

主体的に考えていくためには、考えの基となる知識が必要である。P4L20～34で述べたように、児童Aは専門家の意見を聞くことで目の前の問題を認識し、活動へのギアが入った。また、専門家の確かな知識や技術を児童らの学びと連携できるようにしておくことは、児童たちの課題の認識、課題設定、追究意欲の継続の点で大変有効であった。

手だてウ 「わたしの木」の継続観察

日々の観察から、小さな変化を見つけていってほしいと、継続的な観察を行った。継続観察を意欲的に行うために、「わたしの木」を決めたが、樹木は日々の変容が乏しく、観察から多くの気付きを得ることは難しかった。

(2) 段階「考える」 情報の収集と整理

手だてエ 木の命について考える話し合い

考える段階では、児童の考えを揺さぶり、葛藤を生むことが大切だと考える。気付く段階で習得した知識から個々の考えを深めるために、木々の命について考えさせる場面を取り入れた。P7 (資料5) で述べたように、人命と木々の命の葛藤においては、自分たちのもっている情報だけでは問題の整理ができず、白もくれんの今後についての結論は出せなかったが、他の人の意見を聞いてみたいという新しい考え (活動) を見出すに至った。

手だて才

地域の人の思いを知る活動

強い思いをもった方と触れ合うことが、児童の心を動かし、活動への問題意識と主体性を生んだ。P9 資料15のように児童Bは最初、人命が何よりも優先されるから、弱った白もくれんは切ってしまうべきと考えていた。しかし、学区の方との出会いを通して、白もくれんの命についてもまた考えを深めていき、資料19のように別の方法を考えようとする姿に変容した。継続活動が苦手な児童Aもまた、人の思いに感動を覚え、資料18のように、より意欲的に活動を行っていくようになった。児童の考えを深め、整理し、次の課題とつなげていくために、この手だては大変有効であったといえる。

(3) 段階「実行する」 学びの発信・継承

手だてカ

城南カーニバルで学区や学校全体に活動を広め発信する活動

P10L11～22で述べたように、児童Aは多くの人の思いを集めようと主体的に計画し活動することができた。また、カーニバルに参加した人の反応から、自分たちの活動の手ごたえを感じることができた。(P10L31～35) 手だてとして有効であったといえる。

手だてキ

後輩に思いをつなぐ活動「つなげ！白もくれんプロジェクト！」

この活動は、まだ始まったばかりであるが、話し合う中で児童たちから新しいプロジェクトとして提案されたものである。後輩に学区の方の思いも伝えたい。そう意気込む児童の姿から、また、この活動が児童たちからの発信であることから、今後さらに主体的に活動が展開されることが期待できる。また、考える段階で児童たちの思考を整理し関わらせてきたことも有効であったといえる。

手だてク

卒業してからもかわり続けるための植樹

学区からの協力や寄付をいただいたことで、3月に、当初の予定よりも多くの白もくれんの新木の植栽ができることになった。渡す6年生と受け継ぐ5年生、そして学区の方が一緒にあって植栽をする予定となっている。

以上の点から本仮説は検証されたと考える。

7 終わりに

本実践では、児童らは誰かと関わってその考えや思いに触れるたびに、問題意識を高め主体的に活動できるようになっていった。抽出児の二人が、右のように後輩に自分の思いが伝わったことを「うれしい」と記している。この思いの連鎖が、本実践の大きな成果であるといえる。

また、地域や下学年を巻き込む活動として展開できた点も来年度の活動への指針となるだろう。並木再生の土台を確立したに違いないと確信している。継続させることが大切で、それが一番難しい。今後は細くても長くこの活動を続けていくことが最大の課題と言える。そして数年後には、城南小に白もくれん並木を再生させ、学区の方々と喜びを共有したい。



— 目 次 —

1	はじめに	1
2	研究の仮説と手だて	1
3	指導計画	2
4	抽出児童	2
5	実践の様子	
	(1) 段階【気付く】体験からの課題認識・課題設定	3
	① 白もくれんとの出会い	手だてア
	② 樹木医の授業 専門家からのアドバイス	手だてイ
	③ 私の木の継続観察	手だてウ
	④ 金原さんとの出会い 専門家からのアドバイス	手だてエ
	(2) 段階【考える】情報の収集と整理	6
	① 木の命について考える話し合い	手だてエ
	② 地域の人の思いを知る	手だてオ
	(3) 段階【実行する】学びの発信と継承	10
	① 城南シテイカーニバルで発信する	手だてカ
	② 5年生に保護活動について伝えよう	手だてキ
6	研究の考察	12
	(1) 段階【気付く】体験からの課題認識・課題設定	
	(2) 段階【考える】情報の収集と整理	
	(3) 段階【実行する】学びの発信と継承	
7	おわりに	13